
交響詩篇エウレカセブン インターロード・コレクション

城山達志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

交響詩篇エウレカセブン インターワールド・コレクション

【コード】

N0967H

【作者名】

城山達志

【あらすじ】

交響詩篇エウレカセブンを元にしたそぞろ書き集。

希望の光

> i 1 9 5 4 | 3 2 8 <

「ママー！」

リンクの元気のよい声が聞こえる

「ママー！」

メーテルが駆け寄る。

故郷。

そんなかしこまった単語なんか自分には縁がないとレントンは思っていた。

もっともっと時間が経って、今とは全く違う風格の大人になった頃になって、

そんな言葉を着こなせるようになるんじゃないかと思っていた。

でも、レントンには帰りを待つ者たちがいる。

ベルフォレストは、羽ばたいた若い翼にとつて、自分を生かすものそのものだったのかもしれない。

一度は大空高くを指して強く羽ばたいた翼は、再び舞い戻った、故郷に。

「会いたかったよ、みんな。よくがんばったね」

エウレカは膝について、両手をひろげる。

母の胸に飛び込む子供たち。

「お帰りなさい、ママ」

メーテルは泣き声で言った。

「もうどこへも行っちゃだよ、ママ」
リンクのひたむきな眼差しが夕陽に輝く。

「お帰りなさい！パパ、ママ」
モーリスは長子らしく涙は見せなかったが、声は感極まって震えていた。

「ただいま」
レントンは笑顔で応えた、静かに、しっかりと。

「パパ、約束を守ってくれたんだね。ありがとう！」
「なに、軽い、軽い（笑）」
レントンらしくおどけてみせる。

「それより、モーリスの方が立派だよ。よくがんばったな」
レントンはモーリスの頭を軽くポンポンと叩いた。

「うん！」
モーリスは誇らしげ自分のクリエのリフジャケットのエンブレムを見せた。

「ワシもいろいろとがんばったんじゃないのー」
アクセルが腰に手をやり、半ばおどけたよう、困惑したように言う。

「いけね、忘れてた。じつちゃん、ただいま」
「こいつ、つけて足したように挨拶しておつて！」
夕空に笑い声を風に溶かしながら、やがて夜のとばりがおりはじめる。

再会を果たした幸せな家族を、大きな月がじっと見守っていた。

プラネットロックの浜辺にて

嵐の過ぎ去った入り江。

レントン、エウレカ、モーリス、メーテル、リンクに訪れた困難
試練に晒された愛は微塵も揺るぐことはなかった。

レントンは眩しい朝日に目を凝らした。
左腕に残る僅かな痛みが、全てが夢ではなかったことを物語っている。

やけに眩しくて、そして、静かな朝だった。風はなき、潮騒だけが空気を震わせている。

レントンは、その潮騒の音の中に子供たちの笑い声が溶け込んで来るのに気がついた。

波打ち際で遊びに夢中になる子供たち。

そして、それを見守るエウレカの姿。

幾重もの光をたたえた水面。

その光と影は、彼女の体をつらぬき、そして、その背に誇らしくも美しく輝く光を描き、さらに不思議な色合いを帯びる。
何色でもあり、何色でもない。

「綺麗だ・・・」

試練を乗り越え、レントンの至った境地であろう。

「私、レントンが好き！ずっと、一緒にいたい！」

二人は抱き合い、誓いあった。

浪打際で遊ぶ子供たちを見守りながら、浜辺に寄り添って座る二人。

「ねえ、エウレカ。俺はこの戦いが終わったら、ベルフォレストに帰ろうと思ってるんだ」

レントンは少し照れくさそうに、うつむき加減に話す。

「・・・そう」

エウレカは静かな透き通るような声と、優しい瞳で応じた。

「本来の道に戻るのさ。もっと腕を磨いて、じっちゃんにも負けないくらいのメカニックになりたいんだ」

レントンはグッと右腕を出して見せる。

「素敵だね。帰れる場所があるって」

エウレカは少し寂しそうに視線を落とした。

「エウレカ、その・・・、君にも一緒に来て欲しいんだ！ 無論、子供たちも一緒に！」

「え!？」

エウレカの羽が一瞬、花のように開いた

「ベルフォレストは、刺激に乏しい、つまらない田舎町さ。トラパーが薄くてリフさえ満足にできない」

レントンは遠目に海を見つめながら続けた。

「だけど、自然に恵まれた静かなところだよ。無論、楽園ってわけじゃないけど、戦争は・・・無い」

「レントン……」

レントンは自分のありのままの思いを素直にエウレカに伝えた。

「子供たちが育つには、打って付けの環境だと思っんだ！」

「うん……」

エウレカはスミレ色の瞳を輝かせて頷いた。

「って言ってる俺だけど、昔は『最悪の街だ！』って思ってた。

でも、今は、俺はみんなを連れて帰りたい。どうしても俺の生まれ育った故郷を見せてあげたいんだ」

「うん！」

エウレカはレントンに手を重ねる。

レントンはエウレカに向き直り、両手でその手を握り返した。

「俺、がんばるよ。全力でみんなのこと守るよ！だから……その……俺と……」

「ウン……。嬉しい」

「アハッ、アハハハッ」

「フフッ、フフフッ」

もう、二度とエウレカを戦わせない。

子供たちを戦いの犠牲なんかにはさせない。

それが、レントンの真の戦いであろう。

「武器をとることだけが戦いではない」

レントンはエウレカを抱きしめる刹那、

昔、祖父がよく口にしていた言葉を思い出していた。

「約束だ。ずっと一緒にいよう！ エウレカ」

潮騒は変わらず穏やかにこの星の鼓動を奏で続けていた。

おじいさまの目

夕陽が西の地平に落ち、夜のとばりが辺りをおおいはじめる。

工場の事務所ではアクセルが専用のデスクで図面を真剣な眼差しで追っている。

卓上の電気スタンドの光が彼の顔に深く刻まれた歴史という名の影を浮かびあがらせている。

夕飯の支度ができたことをアクセルに告げにきたエウレカ。事務所の戸口からそつと中を伺う。

おじいさんの真剣な横顔。

エウレカはこのアクセルの姿を見ているのがなんだか好きだった。なんだかとてもなつかしい感じになる。

(不思議な気持ち……)

「おじいさま……、夕飯ができましたよ」
エウレカはそつと声をかける。

「……うん？ ……ああ、ありがとう。すぐに行こう」
険しい表情を一瞬で溶かし、やさしい目をして孫の嫁に伝える、いつものように。

横顔がこちらを向いた瞬間のその瞳。穏やかな水面をたたえたような色合いの瞳。

そう、それは昔いつもニルヴァーシユのコパイシートから私を見つめていてくれた瞳。

ヒゲ面で顔立ち全然ちがうけれど、同じ瞳、同じ笑顔。

(人間って、不思議……)

遺伝子に笑顔を封じ込めて受け継いでいくなんて。

「エウレカ、ゴハンできたの!? 今日は何!？」

そうそう、もう一人いたっけ、同じ瞳、同じ笑顔。

「え!?!なに?」

「……なんでもない。ハンバーグって言ったの」

そう、みんな、おじいさんの目にそっくり。

もし、おじいさまがいなければ、はこの笑顔に出会うことは出来なかったんだ……。

おじいさまって、やっぱりスゴイ!

秋の宝物

「あっ・・・」

レントンはダイニングのテーブルの中央のカゴに今年初めてみる果物の山をみつけた。

「みかんだ!」

まだ少し青みの残るそれは、少し大きめの種類だ。

「それ、おいしそうなみかんでしょう?」

キッチンからエウレカが顔をだす。

「出始めだね。もう売ってるんだ」

レントンは左手で一つ取り上げて、鼻に押し当ててみる。

「ううん、買ったんじゃないの。買い物に帰りに頂いたの」

エウレカ一つ取り上げて両手で丁寧に包む。

近所に畑をもっている家が数軒ある。

「みかんの実がたくさんなっている木をみかけたの。」

その方に『きれいな実ですね。まるで宝ものみたい』って言うたら、

とっても喜んで下さって。『持って行きなさい』って、わけて下さったの」

「へえー、食べてみてもいい?」

レントンはウィンクしながら、ちよつとみかんを振ってみせる。

「うん」

エウレカは頷いた。

レントンはみかんのヘタ側をひっくり返して親指で裂くようにして実を取り出す。

みかんの皮に仕込まれた香りの粒々が弾け飛ぶ。

たちまちにダイニングルームいっぱいには柑橘類特有の甘酸っぱい香りが広がる。

レントンは実の1ビットを口に放りこんだ。

「んー、おいしいけど。酸っぱいなー」

レントンは分けられたみかんをエウレカに差し出す。

「エウレカもどう？ひとつ」

「うん、ありがとう」

レントンに勧められてエウレカも一口にする。

んー、ほんと、酸っぱい。

クシャクシャになったエウレカの表情をみて、レントンは可笑しそうに笑った。

「酸っぱいんだけど、でも好き。甘いだけよりもなんだか刺激的」

「そうだね。俺も好きだよ」

秋の宝もの、一年の実りの結晶。

その姿は宝石のように整然とした美しさを持ち、

その香りは甘酸っぱく人を魅了して、

その味はちよつと刺激的。

「なんだかエウレカみたいだな・・・」

「え？」

「あ、いや、・・・なんでもない」

セカンド・サマー・オブ・ラブ以後、海流のもたらず偏西風の影響で「秋」という季節ができたベルフォレットより。

あらかしの木

「これ！これがいい！」

「うん、上物だね」

「細長いのが多いね、もっと丸いのがないかなあ」

モーリスとメーテルとリンクは居間で収穫してきたものを広げていた。

「何やってんだ？おまえら」

レントンは、テーブル一杯に店を広げてなにやらがんばっている子供たちを覗きこむ。

「ああ！ パパ。見ちゃダメ！」

メーテルが手元を隠す。

テーブルに小ささまざまな木の実がたくさん転がっていた。

「あ！ どんぐりかあ」

レントンはそのウチの一つを摘み上げてみる。

「うん！ ママにどんぐりでブレスレットを作るんだよ！」
リンクが元気よく応える。

「もう！ あんた、言っちゃダメじゃない」
メーテルがリンクをたしなめる。

「うん、なるべく大きい丸っこいのを使いたいんだけど、細長いのはっかりなんだ」

モーリスがレントンに細長い木の実を差し出す。

「ふーん、白櫨しろかしの木の実だね」

レントンは一つつまみ上げてしげしげと観察している。

「え！？このみ白櫨しろかしっていうんだ」

モーリスが感心したように言った。

「そうだよ。細長いどんぐりの実は白櫨しろかしの木になるんだ」

「じゃあさー！じゃあさー！丸いどんぐりは？」

メーテルがどんぐり眼をきらきらさせてレントンに問う。

「それは粗櫨あらかしの木になるんだ、そうだ！確か小学校の北側の林にたくさん生えてたはずだ。

ブナの木もあったはずだ。もっと大きいどんぐりもあるよ、きっと。これから一緒にいってみるかい？どんぐりを採りに」

レントンは子供たちを誘った。

「うん！」

「いく！」

「あたしも！」

こうして、レントンと子供たちはどんぐり狩りに繰出すことになった。

ママにブレスレットをプレゼントするんだ。

ママの喜ぶ顔がめに浮かぶ。

キッチンでは、アクセルが少し大ぶりな新聞紙の包みを運んできた。

「エウレカ、ウチのお得意さんが山を持っておつてな。これをくださいっただ」

アクセルはその包みをテーブルに置き開いて見せた。

「まあ！ 松茸」

エウレカは、キッチンが独特の森の成分を凝縮した香りに満たされるのを感じた。

「うむ、こんなに大きいものをたくさんいただいてしまつてな」

アクセルは松茸の一つを手にとって、香りを聞いてみる。

「ほおー、これは良いものだ」

「今日の晩ゴハンは、松茸づくしですね。早速、準備しなきゃ」

エウレカは楽しそうに羽根を広げて、調理の支度にかかる。

レントンやみんなの喜ぶ顔が目に見え浮かぶ。

秋はなにかと楽しみが多い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0967h/>

交響詩篇エウレカセブン インターロード・コレクション

2010年10月10日01時37分発行